



【特集】声の広報お届けします

「声の広報」が始まった経緯について、当時の広報担当者には話を聞いてみたところ、取材中、目の不自由な人から「広報の内容を知りたい」との要望があったそうです。そこで、考え出されたのが「声の広報」(当時は「音の広報紙」と呼ばれていた)だったのです。目の不自由な人にも、ぜひ言葉の出来事や情報を知ってもらいたいという願いから、平成5年4月から「音の広報紙」という名称でスタートしました。

そんな時、朗読室と録音室が完備された町立図書館がオープン(平成7年1月)。専門に録音できる環境と、カセットテープを一度に多数ダビングできる機器も整ったのです。開始当時は、朗読ボランティアとして活動していた「虹の会」と「やらび」の皆さんの協力により

毎月発行される「広報おうら」を、カセットテープに録音して目の不自由な人に無料でお届けしてまいりました。その後、平成7年から音声訳ボランティア「すみれの会」も新たに加わり、「声の広報」という名称で現在まで続いています。「声の広報」を利用されている人は町内で4人。それと町社会福祉協議会にもカセットテープは送られています。

今年で20年を迎える「声の広報」。声を吹き込んでいたというボランティアの皆さんの力が、必要不可欠だということは言うまでもありません。そこで、今回の特集では、「声の広報」を裏で支える三つのボランティアグループの皆さんにスポットを当て、関係者の皆さんのインタビューも交えながら、お届けします。

毎月交代で三つのボランティア団体が録音

私たちが「声の広報」を録音しています

「声の広報」は、町の広報誌などを音声訳して、カセットテープに録音し、毎月、目の不自由な人に届けられます。音声訳(略して「音訳」ともいいます)とは、目の不自由な人のために、文字を音声に訳すことをいいます。



あなたは「声の広報」を知っていますか？

特集

毎月一回のまごころ定期便

声の広報お届けします

Public Relations of Voice

毎月発行される広報おうらは、「声の広報」として一本のカセットテープに録音されます。「声の広報」が始まって、今年でもう20年。この一本のアナログなテープに、どんな人たちが声を吹き込み、そして、そのテープは誰に向けて届けられているのか…。



虹の会



やらび



音声訳ボランティア すみれの会

▶「声の広報」**無料**「広報おうら」をカセットテープに録音してお届けしています



町では、音声訳ボランティアの皆さんのご協力により、目の不自由な皆さんに、「声の広報」を無料でお届けしています。

▶対象 町内在住で目が不自由な人
※障害者手帳の等級などは、関係

ありません。視力の低下で広報誌が読みづらい人もご利用になれます。

▶費用 無料
▶申込・問合せ 役場企画課 ☎ 47-5007
町社会福祉協議会 ☎ 88-2408

■音声訳ボランティアについてのお問い合わせも、役場企画課までお願いします。



**重要なのは聴きやすく
分かりやすいかどうか**

やらびの代表を務める山形房江さんは、「読み上げるうえで、一番重要なのは聴きやすく、かつ分かりやすいかどうかです。写真と文章を見て分かる記事内容ですと、読み上げてみると、実は分かりにくいものも多くあります」。

「例えば『下表の通り』などの表現は、目の不自由な人にとって

は、分かりづらい代表例です。そこで、読み方の順番を変えたり説明を加えたりして、読み方の工夫をしています」と、録音するときの注意点を語ってくれました。

記事を読み上げるとき、特に注意が必要なのは日付・時間・場所が掲載されている情報。誤読のないように細心の注意を払って録音に臨むそうです。

**目の不自由な皆さんの
役に立ちたい思い**

体調を崩されたときでも車いすで録音に臨んだという山形さん。「長く続けてこられたのは、私たちの音声訳でも少しは目の不自由な皆さんの役に立っているという、やりがいと喜びがあるからです。それとメンバーのみんなが、いい人たちばかりだから、私も頑張れるのだと思います」。

「私たちの音声訳が役に立っているのであれば、これからも続けていきたいです。まちへ恩返ししているという気持ちで取り組みたいですね」と語ります。

**朗読ボランティア経験のある
メンバーが今も音声訳を手掛ける**

やらび

●かつて「はくちょう号」に乗って読み聞かせをしていたお母さんたちが、音声訳のボランティアを長い間続けています。

**とても小さな力ですが、
目の不自由な人の役に立ち
たいという思いがあります**



やらびの皆さん●「やらび」は、沖縄の方言で「童（わらべ）」という意味です。かつて、読み聞かせボランティアをしていた沖縄県出身のメンバーの一人が、命名したそうです

**出発は読み聞かせ
ボランティアから**

やらびは、今から約30年前に結成されました。

幼いお子さんを持つお母さんたちが集まって、ボランティアで読み聞かせを始めたことが結成の直接のきっかけだったといえます。

当時は町立図書館がなく、邑楽町公民館の図書室で読み聞かせをしていました。昭和58年頃には、メンバーの皆さんが移動図書館「はくちょう号」に乗って、主に高島地区の各公民館を回り、土曜日の午後から地区の子どもたちに読み聞かせをしていました。



やらび
代表 山形房江さん
(石打・20区)



虹の会

子育てサークルから朗読ボランティア
そして、音声訳ボランティアへ

●子育てサークルのお母さんたちで結成された虹の会。
その後、音声訳のボランティアを行っています。



虹の会の皆さん●虹の色は、一般的に7色。7人から始まったボランティアなので、虹の会と命名されたそうです

**聴く人の「気持ち」を大切に
温かみのある声を届けたいです**

誌面の雰囲気伝える

虹の会は昭和61年に結成されました。会の前身は、子育てサークル「小枝の会」。町主催の二歳児の子育て教室で知り合ったお母さんたちと、ボランティアで読み聞かせをしていました。当時の広報担当者から目の不自由な人向けに「声の広報」をやらなにかとの働きかけがあり、今に至るそうです。

虹の会代表の平林敬子さんは、「平成5年から広報誌の録音を手掛けるようになりました。大切な



虹の会
代表 平林敬子さん
(現・安中市在住)

のは、聴いてくれる人に誌面の雰囲気を伝えること。どうしたら活気のある誌面を声だけで伝えるか大変難しいことです」。

「最近、広報おうらは写真が多くなりました。ですから、文章をそのまま読んだだけでは伝わらない場合の説明なども必要になってきますね」と語ります。

大切なのは「気持ち」

「アナウンサーのようにはいきませんが、その人の個性のある音声訳も、おもしろいと思います。専門家からみれば、単語のアクセントやイントネーションが多少違う部分もありますが、そこは、その人なりの味として、聴く人にとって温かみのある音声訳を心掛けています」と平林さん。

結成当時のメンバーの一人淡嶋房永さんは、「広報誌をみんなで見ると、たまに意見を交わすこともあります。身近な情報誌として広報おうらは貴重です。読んでいて邑楽町の楽しさが伝わってくる読みごたえのある誌面構成だと



結成当時のメンバー
虹の会 淡嶋房永さん
(鶏新田・14区)

思います。その雰囲気をそのままに、聴いている人にもぜひ楽しんでほしいですね。録音する方も楽しんでみながら、音声訳に臨みたいですね」と語ります。

平林さんは、お母様の介護のため来年の3月で代表を退かるといいます。ですが、可能な限りはお手伝いをするとのこと。来年の4月からは、新代表に淡嶋さんが就かれるということ、取材のときに知りました。

「頼りになる平林さんがいないプレッシャーはありますが、メンバーが入れ替わっても、楽しさの伝わる音声訳を、これからも心掛けていきたいです」と淡嶋さん。

虹の会では、その人のレベルに合わせてページの割り当てなどを決めるそうです。機械的にノルマをつくらず、その人の負担にもつながら、読んでいてもおもしろくなく、ひいては聴いてくれる人に誌面の楽しさが伝わらないからだと、そうなんです。何より、音声訳に臨むときの「気持ち」を大切にしているグループです。





点字一覧表を見ながら、一点ずつ穴を打っていきます

インタビュー●「声の広報」に貼ってある点字テープを作る人
間違えないように、集中して点字を打っています

私が点字を始めたのは、8年前に友人に誘われて町社会福祉協議会主催の点字講習会に参加したのがきっかけです。毎月、「声の広報」のカセットテープに貼る点字テープを作っています。

点字一覧表を見ながら、携帯用点字器を使用して、フィルムに穴を打っていきます。点字は、縦3点×横2点の6点の各点の組み合わせによってできる63種類を基本に字が形成されています。

携帯用点字器



点訳ボランティア「てんでん虫」篠崎効子さん(寺中・26区)

●「声の広報」を利用している人に話を聞きました
町のことを知るのに必要です
でも、不便なこともあります…

「目の見えないことを、ハンディと思つたことは一度もありません。常に自分のできることを考えて工夫しながら、前向きに生きてきました。学生時代はフォークソングやブラスバンド、そしてバンド活動など、常に音楽と一緒の生活をしていました」と戸ヶ崎さんは語ります。

「『声の広報』で邑楽町のことが分かるので、とても貴重でおもしろいですね」。

「ただ、カセットテープだと、もう一度自分の知りたい情報に巻き戻すのに、手間が相当かかります。しかも全て記憶しておかないと、どこに何の記事があったか、巻き戻すのにも一苦労です。時間をなくしたいので、自分の知りたい情報をすぐに聴きたいのにもかわからず、逆に時間がかかってしまう不

「『声の広報』で邑楽町のことが分かるので、とても貴重でおもしろいですね」。

「ただ、カセットテープだと、もう一度自分の知りたい情報に巻き戻すのに、手間が相当かかります。しかも全て記憶しておかないと、どこに何の記事があったか、巻き戻すのにも一苦労です。時間をなくしたいので、自分の知りたい情報をすぐに聴きたいのにもかわからず、逆に時間がかかってしまう不



「声の広報」を利用している 戸ヶ崎澄男さん(前谷東原・2区)

戸ヶ崎さんは1958年生まれ。先天性の目の病気で、小学5年生から前橋市の県立盲学校へ。小・中学課程、高校の普通課程も終え、専攻科の理療科でマッサージや鍼灸の勉強をしました。現在、鍼灸マッサージ院を経営する傍ら、音楽スタジオも経営。パソコンで作曲や曲のアレンジなども手掛け、地区のカラオケ教室の講師も務めるなど、エネルギッシュな55歳です。

「『声の広報』で邑楽町のことが分かるので、とても貴重でおもしろいですね」。

「ただ、カセットテープだと、もう一度自分の知りたい情報に巻き戻すのに、手間が相当かかります。しかも全て記憶しておかないと、どこに何の記事があったか、巻き戻すのにも一苦労です。時間をなくしたいので、自分の知りたい情報をすぐに聴きたいのにもかわからず、逆に時間がかかってしまう不

「『声の広報』で邑楽町のことが分かるので、とても貴重でおもしろいですね」。

「ただ、カセットテープだと、もう一度自分の知りたい情報に巻き戻すのに、手間が相当かかります。しかも全て記憶しておかないと、どこに何の記事があったか、巻き戻すのにも一苦労です。時間をなくしたいので、自分の知りたい情報をすぐに聴きたいのにもかわからず、逆に時間がかかってしまう不



音声訳ボランティア すみれの会の皆さん
●会の名称は、町社会福祉協議会主催の朗読ボランティア養成講座で講師を務めていた金子純子(かねこ・すみこ)さんの「すみ」の字をとり、「すみれの会」と命名されました

聴く人の耳に
ごく自然に入って
心に響く音声訳を
目指したいです

音声訳ボランティア すみれの会
●会の名称は、町社会福祉協議会主催の朗読ボランティア養成講座で講師を務めていた金子純子(かねこ・すみこ)さんの「すみ」の字をとり、「すみれの会」と命名されました

「『声の広報』で邑楽町のことが分かるので、とても貴重でおもしろいですね」。

「ただ、カセットテープだと、もう一度自分の知りたい情報に巻き戻すのに、手間が相当かかります。しかも全て記憶しておかないと、どこに何の記事があったか、巻き戻すのにも一苦労です。時間をなくしたいので、自分の知りたい情報をすぐに聴きたいのにもかわからず、逆に時間がかかってしまう不

「『声の広報』で邑楽町のことが分かるので、とても貴重でおもしろいですね」。

「ただ、カセットテープだと、もう一度自分の知りたい情報に巻き戻すのに、手間が相当かかります。しかも全て記憶しておかないと、どこに何の記事があったか、巻き戻すのにも一苦労です。時間をなくしたいので、自分の知りたい情報をすぐに聴きたいのにもかわからず、逆に時間がかかってしまう不

基本に忠実に、聴きやすさを目指して
音声訳ボランティア
すみれの会

●「広報おうら」と町社会福祉協議会発行の「私たちの福祉」の音声訳を、手掛ける音声訳グループ。聴き手に配慮した音声訳を心掛け、「聴きやすさ」の追求を続けています。



音声訳ボランティア すみれの会
代表 小倉容子さん(新中野・33区)

「『声の広報』で邑楽町のことが分かるので、とても貴重でおもしろいですね」。

「ただ、カセットテープだと、もう一度自分の知りたい情報に巻き戻すのに、手間が相当かかります。しかも全て記憶しておかないと、どこに何の記事があったか、巻き戻すのにも一苦労です。時間をなくしたいので、自分の知りたい情報をすぐに聴きたいのにもかわからず、逆に時間がかかってしまう不